平成24年度帰国隊員/青年支援プロジェクト実施報告書提出日平成25年5月31日		
氏名：天池　なほみ	実施国：ケニア共和国	調査研究
活動名称	ケニア、クワレ県における下痢症の子供へのケアに関する検討 ―現地で使用する“下痢”の認識に基づいて―	
実施期間	平成24年4月1日～平成25年3月31日	

（1）申請した動機

青年海外協力隊・看護師隊員として医療従事者養成学校にて教育活動を実施し、保健サービスへのアクセスの改善・医療人材育成・定着の必要性を感じるのと同時に、地域住民のニーズから公衆衛生の重要性を強く認識した。その後国際保健分野に携わり現地の人々と共に潜在能力の拡大を目指しての活動を志し、長崎大学大学院国際健康開発研究科に進学した。このような背景から、研究のテーマとして、健康問題以外にも経済的・社会的及び心理的側面を含んだ多くの課題を持つ、母親など養育者の子供へのケアに焦点を当てた。これまで子供の罹患・死亡率の低減に向け、多くの介入がされているが、家庭でのケアによって予防できるとされている下痢症が原因による死亡が、現在も上位に上がっている。現地では様々な病に関する認識があり、その認識のもとにケアが行われている。実際のケアを確認するには、現地の認識を理解した上でのケアの評価が必要である。下痢という言葉に対する現地語が一つであるという前提から離れ、現地での“下痢”の認識に基づいた家庭でのケアの実態を明らかにすることは、今後の下痢時の家庭でのケアの指導の強化に結びつけることが出来ると考えたため本調査研究の実施を申請した。

（2）活動内容概要

本研究活動は、子どもの下痢性疾患罹患時における家庭でのケアの実態を明らかにし、適切なケアに影響する要因を探ることを目的とした。その際、すべての養育者が家庭で基本的に行うことの出来る水分補給と食事の継続に焦点を当てて検討した。

2012年4月から9月の準備期間を経た後、10月から12月にデータ収集を実施した。調査は長崎大学熱帯医学研究所ケニア拠点NUITM-KEMRIプロジェクトが実施する健康・人口静態動態調査システムの対象地域クワレ県で展開中の、5歳未満児を持つ世帯対象のコホート研究地内にて3日に1回の世帯巡回による健康チェックを活用し実施した。調査期間中に下痢性疾患を発症した5歳未満児の養育者を対象に、下痢の症例を広く捉えるため現地語を用いた下痢症ケースの特定を行った後、構造的質問紙を用いた調査を対象者の同意を得て実施した。

2012年12月から2013年3月、収集したデータを用いて統計分析を行い（Stata.ver.12を使用）、結果を論文としてまとめた後、長崎大学大学院国際健康開発研究科ににおいて課題研究発表を行った。

子供コホート研究調査員への説明･調査報告確認（上）
水汲み場(右)

（3）活動の成果・苦労した点・反省点等

調査分析の結果、対象地における家庭での下痢症の子どもへの水分補給・食事の継続が十分にされていない現状が明らかとなった。家庭でのケアに影響する因子として、下痢症治療に関する知識の中で特に基本的なケアとして推奨されるORSを含む水分補給･食事の継続に関する知識の欠如が影響因子となっていた。また、現地の病因論にもとづいた乳歯が生えることに関連付けられる下痢に関しては、家庭での水分補給が有効であるという情報の普及や健康教育等を効果的に行うことは、今後の家庭でのケアの改善につながると考えた。効果を可視化し日常生活に結びつけること、実践の中で行動変容を導き出すことが重要であり、今後の取り組みへの優先順位として、子どもが病気になった時の水分補給の必要性を推進し、地域に根ざした早急な取り組みが必要であると結論づけた。
調査準備にあたり、現地にてケニア国立科学技術評議会による研究許可を得るための手続き等に苦労した。また、調査時に下痢症発症例の追跡に係る様々な課題、プロジェクト調査員との連携、現地調査アシスタントの調整、スケジュール管理等に係るマネジメント業務や研究データ分析等、業務の同時進行の困難を経験し、俯瞰力を養うこと、常に目的に立ち戻り柔軟に対応する重要性を学んだ。

（4）今後のプラン

今後は本研究で得られた結果や活動経験を生かし、複雑さの根底にあるものを見抜きカタリストとして支援していくことで、開発途上国の人々自らの力で答えを導き出し、健康・生活の質の向上につながっていく貢献を目指す。具体的には、本研究で得られた知見を共有するべく論文発表に取り組むこと、現地の人々の潜在能力を発展・拡大するために包括的に取り組んでいる援助機関において国際保健・公衆衛生の専門家としてプロジェクトに携わることを志す。